

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：34437

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12181

研究課題名（和文）パースのプラグマティズムに基づく「心の哲学」再構築

研究課題名（英文）A Reconstruction of the Peircean Philosophy of Mind

研究代表者

加藤 隆文（Kato, Takafumi）

大阪成蹊大学・芸術学部・講師

研究者番号：60799980

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、心をめぐって展開されているC・S・パースの記号論を現代の心の哲学の文脈の中で語り直す研究、いわばパースの「心の哲学」を再構築する研究を進めた。本研究の主要な成果としては、現代の自然主義をめぐるプラグマティストの議論状況に対してパースのスコラ的实在論が示しうる特色を明確化する研究のきっかけが得られた。さらに以前より続けているプラグマティズム関連の重要文献の邦訳も順調に進められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、特に命題的態度をめぐるパース独自の实在論を現代にどのように受肉させられるかという問題を検討した。パースは「スコラ的实在論」という説を主張し、自然界で実際に作用している種々の一般法則は实在のものとなし見なしている。この考えは現代の標準的な实在論ないし自然主義とは隔たりがある。しかしこの主張は規範学というパース思想独自の考えと密接な関連があり、これを踏まえれば、パースのプラグマティズム思想は現代の心の哲学に対しても、独自の貢献を果たせる。本研究の過程で、ヒュー・プライスらの主張する主体自然主義とパースのスコラ的实在論の関係についてさらなる探究を深める必要を認識した。

研究成果の概要（英文）：This project has reconsidered Charles S. Peirce's semiotics in the contemporary context of the philosophy of mind. This research has shown that Peirce's scholastic realism has a potential impact on contemporary pragmatists' discussion about naturalism. As a byproduct of this research, Japanese translation of essential works on pragmatism has greatly advanced.

研究分野：哲学

キーワード：プラグマティズム 心の哲学 パース 記号論

1. 研究開始当初の背景

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて精力的に執筆活動を行なったアメリカの哲学者パースはプラグマティズム思想の創始者の一人として知られるが、彼の膨大な手稿群は長い間日の目を見なかった。現在も手稿の解析作業は続いており、日々パース哲学の新たな側面が発掘されている。本研究は、パース哲学のこれまで見過ごされてきた重要な側面のうち、現代風に言えば「心の哲学」に相当する部分に注目した。そして、パースのプラグマティズム思想を体系的に把握した上で、パースの心の理論を現代の心の哲学の文脈と接続し、パース思想は現代の心の哲学研究者の視点から見ても先鋭的な洞察を多分に含むことを明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、心をめぐる C・S・パースの思想を現代の心の哲学の文脈の中で語り直すこと、いわばパースの「心の哲学」を再構築することを目的とする。具体的には、パース自身が心をめぐって論じている種々のテキストや先行のパース思想研究を参照しながら、次の 2 つの研究を行う。すなわち、(A)現代の心の哲学における「拡張した心」理論とパース思想の比較・発展研究と(B)パース思想に基づく命題的態度の理論を再構成する研究を遂行する。(A)に関しては、パースの連続主義が「拡張した心」理論の問題点を克服する議論を提示してくれるという見通しが明らかになっている。本研究ではこの点をさらに発展させ、生態系内の記号過程としての心的過程を再解釈することを目指した。(B)に関しては、Baker (*Explaining Attitudes*, 1995) の提案する実践的实在論を活用し、現代の哲学研究の文脈においても独自の意義を示せるプラグマティストの命題的態度の理論を提案することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、命題的態度をめぐるパース独自の实在論を現代にどのように受肉させられるかという問題を検討してきた。パースは「スコラ的实在論」という説を主張し、自然界で実際に作用している種々の一般法則は实在のものとは見なしている。この考えは現代の標準的な实在論ないし自然主義とは隔たりがある。しかしこの主張は規範学というパース思想独自の考えと密接な関連があり、これを踏まえれば、パースのプラグマティズム思想は現代の心の哲学に対しても、さらには現代のプラグマティズム研究に対しても、独自の貢献を果たせるのではないか。そのような見通しのもと、本研究ではまず、L・R・ベイカーの提案する実践的实在論を活用し、パースのプラグマティズムに基づく命題的態度の理論が現代の自然主義をめぐる議論状況にどういった貢献を果たすのかを明らかにした。さらにこの成果を踏まえ、本研究では続いて、ヒュー・ブライスやマイケル・ウィリアムズ、ロバート・ブランダムなどの現代のプラグマティストたちが熱心に議論を交わしている主体自然主義 (subject naturalism) とパースのスコラ的实在論の関係について探究を深めた。こうして本研究は、ネオ・プラグマティズムとパースのプラグマティズムとを交差させる方向へと展開した。

4. 研究成果

本研究では、心をめぐって展開されている C・S・パースの記号論を現代の心の哲学の文脈の中で語り直す研究、いわばパースの「心の哲学」を再構築する研究を進めた。本研究の主要な成果としては、現代の自然主義をめぐるプラグマティストの議論状況に対してパースのスコラ的实在論が示しうる特色を明確化する研究のきっかけが得られた。さらに以前より続けているプラグマティズム関連の重要文献の邦訳も順調に進められた。

以下、各年度における研究成果をまとめる。

【2018 年度】

4 月に、応用哲学会にて「プラグマティズムと实在：パースの实在論と実践的实在論をめぐって」という題の口頭発表を行なった。この発表では、態度の实在性をめぐる現代の議論に注目することで、パースのプラグマティズムの現代的意義を展望した。その後、この発表に基づく論文を執筆・投稿し、2019 年に応用哲学会の機関誌にて公開した。

6 月には、アメリカ哲学フォーラムの企画パネルにて、「知覚、推論、アイコン」という題の口頭発表を行なった。この発表は、パースの「存在グラフ」においてアイコン性なるものがどういった意義を持つのかを明らかにする共同研究の一環である。発表内では、知覚判断が下される過程には二つの段階においてアブダクションという推論過程の要素が認められるということを中心とするパース研究者の論説を検討し、それを踏まえて、アイコンとアブダクションの関連を明らかに

した。

10月には、美学会全国大会にて、「分析プラグマティズム美学事始め：まずは「経験」から」という題の口頭発表を行なった。この発表では、現代のネオ・プラグマティズムの泰斗ロバート・ブランダムが提唱する「分析プラグマティズム」の考え方を美学に応用することを試みた。その後、この発表に基づく論文を執筆・投稿し、2019年に『美学』にて公刊した。

さらに3月に、科研費助成事業「新学術領域研究」トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築（顔・身体学）顔と身体表現の比較現象学（代表：河野哲也）の一環で開催された『インゴルドと「あいだ」のシンポジウム』にて、「芸術とともにある人類学とエージェンシー論の再考」という題の口頭発表を行なった。

【2019年度】

4月に、応用哲学会サテライトイベント「社会学と哲学の協業に向けて 質的調査・推論主義・プラグマティズム」において、「人類学者の目にプラグマティズムはどう映るのか」という題の口頭発表をおこなった。

6月には、応用哲学会の機関誌 *Contemporary and Applied Philosophy* にて、「プラグマティズムと実在：パースの実在概念と実践的実在論をめぐって」というサーヴェイ論文を公刊した。この論文では、態度の実在性をめぐる現代の議論に注目することで、パースのプラグマティズムの現代的意義を展望した。さらに、美学会の機関誌『美学』にて、「分析プラグマティズムからの提案 分析美学の問い直しのために」という論文を公刊した。この論文では、現代のネオ・プラグマティズムの泰斗ロバート・ブランダムが提唱する「分析プラグマティズム」の考え方を、現代の美学の議論に応用した。

本研究においては、プラグマティズム関連書籍の翻訳プロジェクトもひとつの重要な柱となっている。かねてより本研究では、気鋭のプラグマティズム研究者シェリル・ミサックの手によるプラグマティズムの概説書 *The American Pragmatists* (2013) の翻訳を単訳にて進めていたが、ついに本年度11月、この翻訳書（『プラグマティズムの歩き方 21世紀のためのアメリカ哲学案内』上・下巻）を公刊できた。さらに、共訳にて進めているネオ・プラグマティズムの泰斗ロバート・ブランダムがプラグマティズム論を集めた *Perspectives on Pragmatism* (2011) の翻訳も進捗し、校正刷りの段階に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤隆文	4. 巻 70
2. 論文標題 分析プラグマティズムからの提案 分析美学の問い直しのために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 49, 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆文	4. 巻 10
2. 論文標題 プラグマティズムと実在：パースの実在概念と実践的実在論をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Contemporary and Applied Philosophy	6. 最初と最後の頁 93, 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤隆文
2. 発表標題 人類学者の目にプラグマティズムはどう映るのか
3. 学会等名 応用哲学会サテライトイベント「社会学と哲学の協業に向けて 質的調査・推論主義・プラグマティズム」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤隆文
2. 発表標題 芸術とともにある人類学とエージェンシー論の再考
3. 学会等名 インゴルドと「あいだ」のシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤隆文
2. 発表標題 分析プラグマティズム美学事始め：まずは「経験」から
3. 学会等名 第69回美学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤隆文
2. 発表標題 知覚、推論、アイコン
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第5回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤隆文
2. 発表標題 プラグマティズムと実在：パースの実在論と実践的実在論をめぐって
3. 学会等名 応用哲学会第10回年次大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 クリストファー・フックウェイ、村中 達矢、加藤 隆文、佐々木 崇、石田 正人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 536
3. 書名 プラグマティズムの格率	

1. 著者名 シェリル・ミサック、加藤 隆文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 プラグマティズムの歩き方 上	

1. 著者名 シェリル・ミサック、加藤 隆文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 プラグマティズムの歩き方 下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----